「せめて一時の休息を」

機動捜査　男性警察官

平成23年４月29日、私は第４次派遣として宮城県警機動捜査隊へ派遣となった。

宮城県警機動捜査隊では、警視庁、静岡県警と共に治安維持活動に従事する事となったが、最初の顔合わせの際、今回が第４次派遣であるにもかかわらず、静岡県警のある若い係員は、既に２回目の派遣であることを知った。

私は、派遣された機動捜査隊員の中でも一際小柄なその若い係員に近付き話しかけた。もう既に２回目の派遣というのが気になったからである。

聞くところによると、その若い係員は、出身は宮城県塩釜市であり、父親も兄も宮城県警の警察官であること、しかも父親は宮城県警機動捜査隊隊員であり、その若い係員が指さした方を見ると、その若い係員とよく似た年配の小柄な刑事が机に向かっていた。

さらに私は、親族や実家の安否について尋ねると、その若い係員は「父も母も実家も大丈夫でした。」と答えた。私は一瞬安堵したが彼の次の言葉に強い衝撃を受けた。「兄も無事だったのですが、ただ兄嫁と兄の１歳の子供が未だ行方不明で見つかっていないのです。」と。

聞けば、彼の兄は宮城県沿岸部の駐在所に勤務しており、地震発生当時、自身は本署で勤務していたため津波による被害は免れたものの、駐在所自体は津波により流され、妻と子が行方不明になっているとのことであった。

石巻市内の警戒活動

私は彼にかける気の利いた言葉も見つからず、ただ彼と、彼の父親を呆然と見つめることしかできなかった。

孫と義理の娘を同時になくした、一際小柄な初老の刑事は、机に向かい何を思っているのか。そして、地元や家族を思い、復興のために駆けつけた目の前の若い刑事、悲しみを押し隠しつつ、警察官としての職務を全うしようとするそんな彼等の胸中を思うと胸が張り裂けそうになった。

そして、いつ終わるとも知れない２交替の激務の中で、憔悴しながらも、黙々と今自分がやるべき目の前の職務をこなす宮城県警機動捜査隊員。そんな彼らをみていると、「せめて我々が応援に来ている間だけでも、少しでも体を休めて欲しい。今は我々に任せておけ」そう思わずにはいられなかった。

派遣当日にそのような衝撃を受けたことにより、まず瓦礫が山積みになった悪路を走り回

り、拠点となる箇所、目標物、主要幹線道路を把握した。そして、相勤者と「認知した事案は私たちですべて対応しよう」と決意し、地図とカーナビを頼りに、揉め事や不審者情報という、処理結果としてはさほど大きくはなかった事案でも真っ先に対応した。我々がいる間に少しでも、宮城県警の仲間が少しでも休めるように、宮城県の県民が少しでも安心できるようにと。

石巻市内の被災状況

目立った事件検挙という結果を残すことができなかったことが悔やまれるが、今自分ができる精一杯のことをやったつもりである。しかし、帰県すると、まだ何か出来たのではないか、もっとやれたのではないかとの気持ちが消えずにいる。

未だに避難所の小学校の遊具で遊ぶ幼い子供達を、頬杖をついて眺めている母親の姿が目に焼き付いて離れない。